

磁場に向けて

2002年～2003年

Toward a Magnetic Field

2002～2003

Matsuo Katoh
加藤松雄

ここに自作十二点の抽象絵画を掲載した。図版としての絵画は一応リアルな対象となるが、文章で述べる場合は間接的・抽象的になる。又、述べる内容は、直接制作にかかわること、表現テーマ、あるいは意識としての思想的問題などさまざまな切り口がある。画面としての表象は、いわば大小さまざまな矩形色面をランダムに散在させたものである。それは恰も落葉群がバラバラと地上に舞い散ったその一瞬に遭遇したときの感じに似ている。描くというよりも色面を伏せていくといった感じだ。西欧的な立体透視図法的表現とは全く異った手法である。逆も又真と考えている。目に写るところとしては薄くペラペラをよしとし、その方向で模索をつづけている。

論点を変えてみよう。ユングによれば、自我は意識の中心であるが、自己はこころの全体、意識と無意識を共に含むものであるとしている。作品制作は途上において当初自我から入り自己へ深めるということになる。換言すれば、表層意識から深層意識へ接近することとなる。

そこは又、記憶が蘇る場でもあって少年時代の一時期陥った切なく苦しい困惑と劣等感が浮上する。第二次大戦中、「神国日本」「大和魂」などは当時受けた教育の心髄であった。敗戦…。占領下ではアメリカ式の民主主義が組み込まれ、日本の精神性といわれる領域はことごとく悪に通じているとして抹殺させられた。その上でつぎのことばで打ちのめされた。「西欧において発見された原理、文明の利器を活用し金儲けを貪る猿真似日本人」つづいて「エコノミックアニマル」振り返れば確かに縦社会を容易につくりだす単一民族として特質の一面、経済復興に向けた懸命な励み。しかし惨めで傷ついたことは確かだ。「繊細で穏か、感性豊かな日本人」といわれるとき快い響きを得て一息はするが…。

ユングが現代人に警鐘する自己奪回の問題は、日本人の場合も屈辱感返上の意味では方向性を自覚させ示唆を与えている。



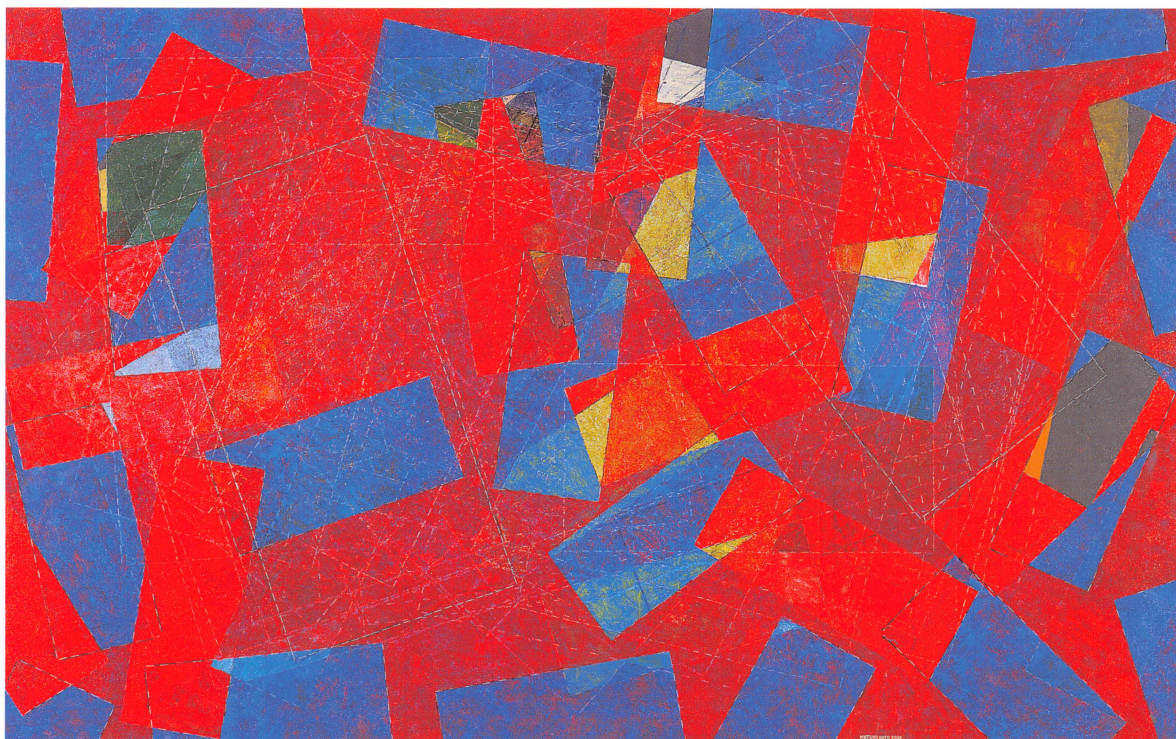
「磁場に向けて2003-M」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×120cm2003年



「磁場に向けて2002-C」キャンバスに油彩162×227.3cm2002年



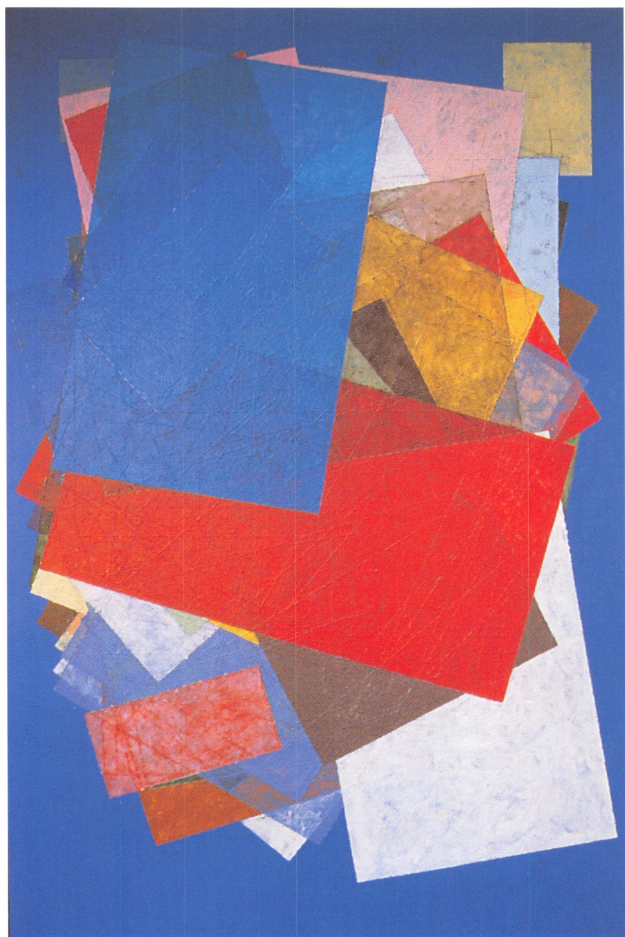
「磁場に向けて2003-D」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩
120×120cm2003年



「磁場に向けて2002-G」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2002年



「磁場に向けて2003-F」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩120×194cm2003年



「磁場に向けて2002-B」木製パネルにキャンバス、
ホチキス、油彩195×120cm2002年



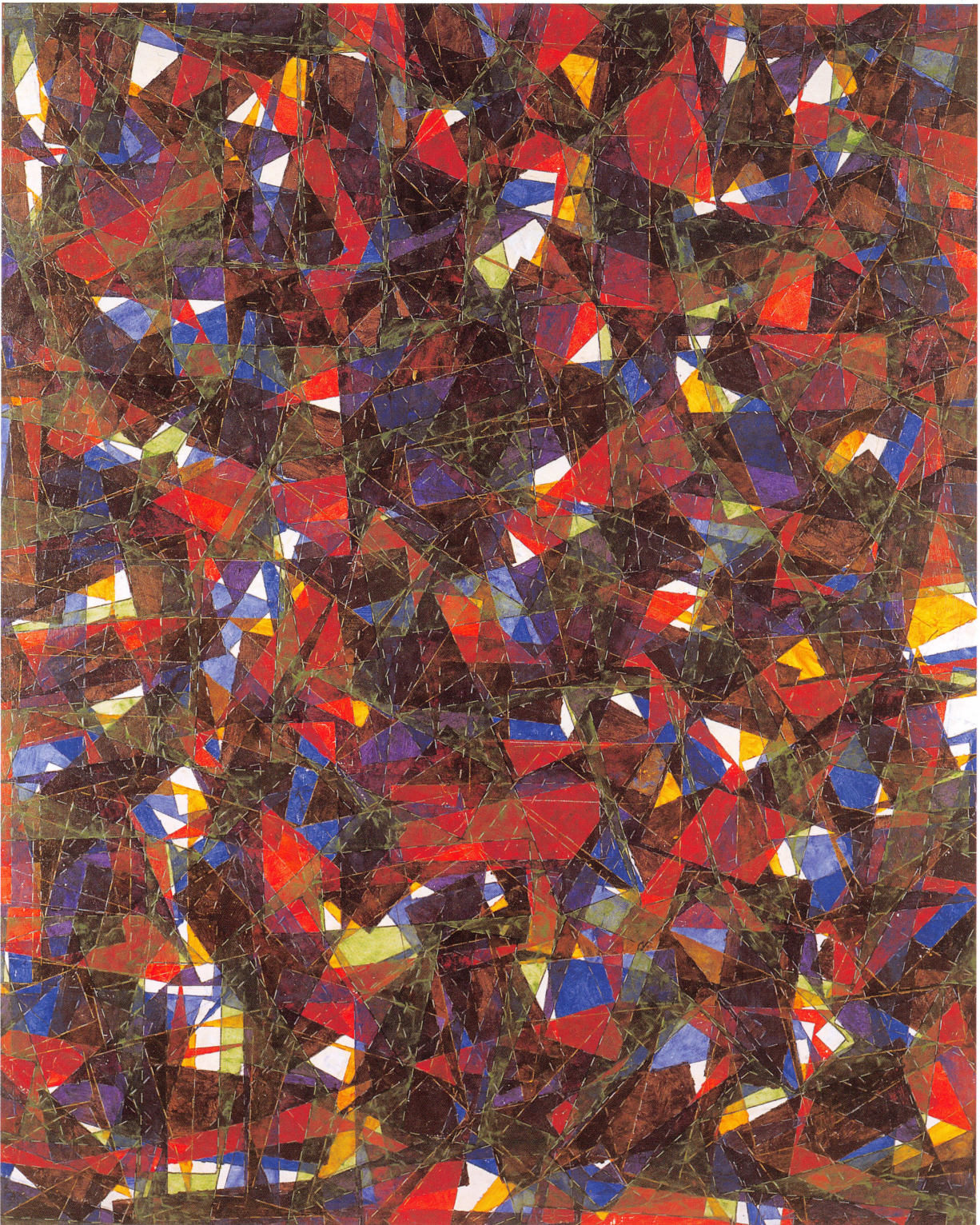
「磁場に向けて2003-N」木製パネルにキャンバス、
ホチキス、油彩162×130cm2003年



「磁場に向けて2003-C」木製パネルにキャンバス、
ホチキス、油彩162×130cm2003年



「磁場に向けて2003-O」木製パネルにキャンバス、
ホチキス、油彩120×120cm2003年



「磁場に向けて2003-K」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩162×130cm2003年



「磁場に向けて2003-E」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩130×162cm2003年



「磁場に向けて2003-L」木製パネルにキャンバス、ホチキス、油彩130×162.5cm2003年